令和6年度　学校自己評価

鈴鹿市立井田川小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ＩＣＴ活用	1　授業改善 ○学力向上・授業力向上に係る研修会　→年間　7回うち指導主事等招聘 年３回 ○全教員による授業公開→年間延べ7回以上実施 ○全国学力・学習状況調査・みえスタディ・チェックの結果分析による本校の課題の把握と検証 →年間２回以上 ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「学校の授業はよく分かる」肯定的回答８５％以上　→８８％（－１％） ・児童アンケート「学級の友だちとの間で話し合う活動の場面では、自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思う。」　肯定的回答８５％以上　→７２％（－１３％） ・児童アンケート　「学習の中でコンピュータなどのＩＣＴ機器を使うのは勉強の役に立つと思う」 肯定的回答９０％以上　→９２％（－１％） ●全国学力・学習状況調査（６年生）・みえｽﾀﾃﾞｨ・ﾁｪｯｸ（４，５年生） 全国学力・学習状況調査は全国平均，みえｽﾀﾃﾞｨ・ﾁｪｯｸは県平均を上回る 2　基礎学力の定着 ○家庭学習の充実→「家庭学習の手引き」配布，２回以上の啓発 ○スクリーンタイムの縮減→白鳥中学校区ノーメディアデー年３回以上 ○読書活動の推進→図書館祭り，家読・親子読書３回以上，図書館の整備 ＜検証＞ ●学校アンケート ・保護者アンケート「ご家庭でのお子さんの学習習慣はついている」 肯定的回答８０％以上　→７６．６％（＋０．６％） ・児童アンケート「家で自分で計画を立てて，勉強をしている」 肯定的回答８０％以上　→６２％（－２％） ・児童アンケート「普段（月～金）１日当たりどれくらいの時間，勉強をしていますか」 ３０分以上８０％以上　→６３％（－１９％） ・保護者アンケート「読書時間１０分以上」　６０％　→４４．２％（＋８．２％） ・児童アンケート「読書時間１０分以上」　６０％　→５２％（－９％） ・児童アンケート「読書は好きだ」　肯定的回答８０％以上　→６７％（－９％） ●図書貸し出し冊数　鈴鹿市年間平均一人あたり50冊　→７６冊以上 3　学習規律・生活習慣の定着 ○校内指導の統一→研修・人権部会，生活指導部会での協議検討 ○児童会による自主活動の充実 →生活目標（すすんであいさつ，廊下歩行、整理整頓等）の設定、児童会による呼びかけ ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「家族や地域の方に挨拶をしている」肯定的回答８５％以上　→９１％（＋３％） ・児童アンケート「学校のきまりを守っていますか」肯定的回答９０％以上　→８９％（－３％） 4　ＩＣＴを効果的に活用した学習指導 ○ＩＣＴ機器を効果的に活用した学習内容の充実（１日１回以上の端末活用） ○端末の持ち帰りと家庭学習での活用（４年生以上，週１回以上　※2学期現在） ○「ＩＣＴ活用」の視点を入れた授業研究 ○ＩＣＴ支援員の積極的な活用，ＩＣＴ支援員を講師にした研修会の実施 5　校務のＩＣＴ化 ○校務のＩＣＴ化による総勤務時間の縮減 会議資料のペーパーレス化、教材の共有化、アンケート集会、出席管理等 ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「学習の中でコンピュータなどのＩＣＴ機器を使うのは勉強の役に立つと思う」 肯定的回答９０％以上　→９２％（－１％） ●ＩＣＴ機器を効果的に活用した学習内容の充実（１日１回以上の端末活用）　→１００％ ●端末を週１回以上家庭学習に活用した割合（４年生以上，週１回以上　※２学期現在）→１００％ ●「ＩＣＴ活用」の視点を入れた授業研究　→年６回 ●ＩＣＴ支援員を講師にした研修会の実施　→年１回 ●毎月の過重労働時間　平均30時間以下　→平均22.1時間（4～12月平均） ●月80時間を超える時間外労働者の年間延べ人数　年間０人　→年間0人 ●月45時間を超える時間外労働者の年間延べ人数　年間０人　→年間0人	1　授業改善 ○聴き合い、伝え合い、主体的に学ぶ子どもをめざして」を研究主題として、ペア・グループでの協働的な学びに重点を置いて授業改善を進めた。教員相互の授業参観や、「全国学力・学習状況調査」と「みえスタディチェック」の結果分析から、本校の強みと弱みを検討し、弱みの部分を底上げする問題を精査し、授業改善や長期休業中の家庭学習に採用するなど行っている。その結果、児童アンケートの「学校の授業はよくわかる」の肯定的回答が88％（前年比-1％）となった。「学習の中で、コンピュータ等のICT機器を使うのは、勉強の役に立つと思う。」の肯定的回答は92％と高く、教育活動にICT機器の有効活用も取り入れていくことが子どもの意欲につながると考える。 ▲「授業では課題の解決に向けて、自分で考え取り組んでいたと思う。」の肯定的な回答は78％（前年比-6％）と減少したが、学習活動の中で、ペア・グループ活動を取り入れ、他者とともに学ぶ学習スタイルが、「学び合う」活動と思っていない児童がいるのではないか。「学級の友だちとの間で話し合う活動場面では、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。」の肯定的な回答が72％（前年比-13％）であった。このことから、授業で意見が分かれる場面を設定し、自分と異なる意見について考えることが楽しいと思える取組を行う必要がある。 ○教職員の研修では、協働的な学習やICTを効果的に活用することについて研究授業を行ったり、研修会に参加したりして日々研鑽に励んでいる。 2　基礎学力の定着 ▲「家庭学習を３０分以上行っている」児童が、昨年度82％であったが、今年度は63％と大きく減少している。日々の学習が主に音読・計算・漢字とパターン化されているため習慣的に取り組めるように指導していく必要がある。 ○読書活動の推進については、図書館祭り、家読・親子読書の取組（年３回以上）図書館の整備に学校図書館巡回指導員や地域の図書ボランティアの方々のご支援のおかげで、様々なイベントを開催することができ、多くの児童が参加し、読書への興味や関心が高まった。 ○井田川小学校の図書貸し出し冊数は、年間平均一人あたり７６冊以上に上っており、鈴鹿市の児童一人当たりの平均貸し出し冊数目標値50冊を大きく上回っている。上記のような創意工夫ある取組により子どもの読書への関心が高まっていると考える。 ○管理職が中心となって、夏季休業中に学校図書館を図書ボランティアと連携して地域に開放し、児童が宿題に取り組んだり、親子での来館があり、触れ合いの場や居場所としても活用した。 ▲子どもたちが借りている本のジャンルに偏りがある。図鑑等に人気があり、文学作品を読む児童が少ない。また、高学年の児童が低学年向けの本を読んでいることがある。 3　学習規律・生活習慣の定着 ▲「あいさつをしよう」「学校のきまりを守ろう」「みんなでやろう　さしすせそうじ」等、毎月の生活目標の児童会が呼びかけるとともに学級指導を行っている。特に廊下を走る児童が散見され、安全上の課題となっている。 ▲白鳥中校区統一で行っている各学期に数日間のノーメディアデーの取り組みは、家庭教育の分野でもあることから学力向上や非認知能力の向上についてのエビデンスを示して啓発、推奨する以外にないのが現状である。また、様々な情報収集にはメディアが必要であることから、「ノーメディアの取り組み」から名称を「スクリーンタイム減少の取り組み」とする方がわかりやすいと考える。 4　ＩＣＴを効果的に活用した学習指導 ○授業や宿題で積極的かつ効果的なICT活用を行うことができたと言える。 ・校内研修会ではICTの活用に終始するだけでなく効果的な活用方法になっているかを検討・検証することができた。 ・児童もICT機器の活用が学習によい影響があることを実感できている。児童アンケートの「学習でパソコンなどの機器を使うのは勉強の役に立つと思う」の項目においては、全校児童の約７割の児童が「はい」と答えている。また、「どちらかといえばはい」を含むと約９割の児童が肯定的な回答である。 ▲児童アンケートにおいて、中学年・高学年は約１割の児童は否定的な回答をしている。このことから「ICT機器の操作が得意な児童と困難な児童の差が生まれている」ことや「教員によって活用頻度・活用方法に差がある」と思われる。「低学年の段階で基礎的なスキルの定着」「効果的なICT活用の検討と検証」を続けることが重要である。 5　校務のＩＣＴ化 ○職員会議の資料などは事項書のみ紙で配付し、提案文書はパソコンを使って資料を見ている。 ○学校アンケートや学校だよりのデジタル化を進められた。 ○欠席連絡等のアプリ化が市で進められおり、今年度中には実施される予定である。 ○回覧文書などは紙媒体で回ってくることが多いため、回覧するにあたって手間が少ないので、本校においてはデジタル化しなくても大きな問題はない。 ○校務のICT化のより一層の推進により、会議のペーパーレス化はかなり進んでいると思える。教材の共有化やデジタル化、アンケート集計、下校時刻表のデジタル配信などを行った。 ○時間外勤務はR5年度26.7時間を22.1時間に縮減できた。また、同時に時間外勤務80時間、45時間越えはともに0時間にすることができた。	・児童の実態に応じて、朝学の時間に国語以外に算数の学習を取り入れるなど、既習内容の定着や基礎学力の底上げを図る対策を検討する。 ・特に高学年が69.5％であることから、主体的な学びにつながるよう家庭学習の大切さや端末の活用方法等について家庭に周知し協力を求める. ・ゲームの時間に対する親子のとらえ方のずれについて、ゲームの多様化や普及も、親世代と子ども世代の価値観の要因ではないかと考えられる。ゲーム時間の基準は学校で一律に言及するものではなく、家庭やその子自身の時間の使い方にもよると思うので、「家庭でのきまり」を設けてもらう意味でも、家庭での話し合いを促していく。 ・家庭学習のサポートの必要性を感じる家庭には直接お願いするなどしているが、なかなか協力を得られない実態もある。 引き続き、学校だよりや学年だより配信メール・連絡帳など様々な方法で情報公開・情報共有し、家庭と学校が連携し児童を児童を支える。 ・持ち帰った端末でどのような課題をさせるのか再度、教職員で確認、共有する必要がある。 ・授業等で、読む・書くワークシート、よむYOMIワークシートの復習の時間をとるよう検討する。 ・次年度以降も、指導主事等を招請し、校内研修会の中で、協働的な学びや複線型授業のあり方、ICTの効果科的な活用について、研修を深める必要がある。	・活動方針を明確に決め、実施した努力に良い成果が出ている。高く評価します。 ・4月の学力調査の結果から、これまでのやり方、方向性が刈り取られ、本年度の活動展開につながっていると思います。来年度の学力調査が期待されます。 ・課題は「文章を読んで内容を正しく理解できるか」「場面・状態がイメージできるか」であると思います。読書はその能力を養う最良の手段と考えますので、これからも読書活動の推進をよろしくお願いします。新刊の紹介、読書レターの掲示など、本の楽しさが色々紹介されていて大変良いと思います。子どもたちが興味を持てる本をAIで見つけるのも一つの方法かと思います。 ・基礎学力の定着で「家庭学習の手引き」を配付し、2回以上の啓発の中、保護者と児童が向き合う時間を考えます。よい取り組みですので、各家庭での親子との会話を充実し、学習規律や生活習慣の定着へと結びつくことを願います。 ・児童一人一人の個性を活かせるような対応で授業が進められたらと思います。生活習慣の面も、勉強と同じように協調性を守れるように生活してほしいです。 ・児童問７（1日どのくらい勉強をしますか）について、年々低下している。保護者に対して、危機感を示す必要があるのではないか。 ・児童問９・保護者問９（1日どのくらいテレビゲームをしますか）について、児童と保護者との感覚にずれが生じているように思う。 ・家庭学習では、家庭内で勉強ができるようなムード作りが必要なのか。 ・家庭学習時間の減少は、我が身を振り返っても言われなければやらない子どもが多いのではないかと思う。学校と家庭での協働を願う。 ・読書では、年齢に適していない本を借りるとあるが、内容により良いものもあると思う。 ・あいさつが９１％というのは、感覚としてそれほどではないように感じる。 ・ICTの推進はおおむね良好との印象です。ただ、得意な子、そうでない子がいるのは仕方ないことで、それぞれの個性を大切にみてあげて、その子になったインターフェイスの模索あるいはその子の興味とICT機器とのつながりができないか等の検討もしてみるのも一つの方法かと思います。 ・活用については、先生方の労働時間を短縮できている。児童に関しては、抵抗なく活用できると考えていたが、１割程度が否定低回答をしたことは予想外でした。 ・これからの時代、ICT活用は必須だと思うので、授業や家庭学習などいろいろな作業に積極的に活用してほしい。 ・学校のＩＣＴ化が進み、先生の時間外勤務が減少したことは評価できる。ＩＣＴ機器の利用は今の時代避けて通れないが、今後も、なんでもＩＣＴではなく、内容に応じてベストな方法を選択し、アナログ的な手法も大切にしてほしい。 ・授業改善では、ICTの使用は勉強には役に立つが、時には悪くなることもある。指導等の誤りがないようにしてほしい。 ・機器の操作に対する得意の子、不得意な子の差が埋まるような指導をお願いしたい。 ・子どもたち全員のICTのスキルが一定レベルにするのが望ましい。

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
長期欠席対策	1　不登校児童への支援 ○児童が安心して学べる魅力ある学校・学級づくり ○学校内外の教育相談・支援体制の充実 （スクールカウンセラーや関係機関の助言を生かしたケース会議、支援会議の実施） ○教職員の教育相談に関する専門性の向上 ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる。」 肯定的回答９５％以上　→７９％ 「自分には、よいところがあると思う。」（自己肯定感）　肯定的回答９０％以上　→７６％ ●不登校児童が、学校内外の機関等での相談・指導を受けた割合　　１００％　→１００％ ●スクールカウンセラーのコンサルテーションや教育相談に関する研修を受けた教職員の割合 １００％　→１００％ 2　特別な支援の必要な児童への組織的な対応 ○状況に応じた支援体制の確立→定期的な情報共有（月１回実施）　定期的な支援会議 3　安心して学び合える学級集団づくり ○いじめのない学習集団づくりの推進　→ピンクシャツ運動 4　校内研修の実施 ○通級指導教室、放課後ディサービス、学童保育のいずれか1回の視察と還流報告の実施 ○スクールカウンセラーとの連携→スクールカウンセラーとのコンサルテーションの実施 ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「学校には楽しく登校できている」肯定的回答８５％以上　→８９％（＋７％） ・児童アンケート「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる」 肯定的回答９０％以上　→７９％（－３％） ・児童アンケート「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」 肯定的回答９５％以上　→９６％（－１％） ・児童アンケート「学校で困ったときは，先生に相談している」 肯定的回答８０％以上　→７７％（＋２％） ・児童アンケート「学校のきまりを守っている」肯定的回答９０％以上　→８９％（－２％） ・保護者アンケート「早寝，早起き，朝ごはんの習慣がついていますか」 肯定的回答９０％以上　→８５．８％（＋１．８％）	現在、不登校児童は３名。３名中２名が教育支援センターけやき教室・さつき教室に通室している。 ○不登校児童やその保護者に対して、担任や職員などが定期的にコンタクトをとり、学校と繋がっている状態にあり、関係機関等の連携も密に行っている。 ○学校外の教育支援機関であるけやき・さつき教室の教員と定期的に情報交換を行い、対象児童の様子を学校側も把握している。共有された対象児童に関する情報を活かしながら保護者や児童に対応することができる。 ○支援会議を行い、保護者の思いや今後の方向性など、保護者と学校の思いを擦り合わせている。 ○職員間で気になる児童の情報交換を密にし、鈴鹿市不登校支援初期対応マニュアルに則し、早期発見早期対応、家庭連絡、家庭訪問等の取り組みを徹底した。 ○10日以上の病欠児童が多いと感じるが、新たな不登校児童は抑制することができた。 2　特別な支援の必要な児童への組織的な対応 ○毎月行われる職員会議で、特別な支援を必要とする児童についての情報共有ができた。 ○支援会議については、毎学期担任と保護者が連絡を取り合い、必要に応じて開催した。 ○学童及び放課後等デイサービス等の見学については、長期休暇等を活用して行い、その都度還流を行うことができた。 ○月に1回はスクールカウンセラーに来校していただき、児童や保護者の相談、各学年の児童観察とアドバイス、その後のコンサルテーション等を行い、連携して支援を行うことができた。 3　安心して学び合える学級集団づくり ○児童アンケート「学校には楽しく登校できている」の肯定的回答が89％（昨年度比＋7％）であった。縦割り班による異学年交流を年間５回と増やし実施した。学級の垣根を越えて関わり、楽しそうに過ごす姿が見られた。 ○児童会役員を中心に、ピンクシャツ運動によるいじめ防止運動を年に２回行った。自主的にピンクのものを身に着けたり、「言葉遣い」に焦点を当て、具体的に減らしたい言葉を学級ごとに設定し、振り返ったりする活動を行った。しかし、児童アンケート「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる」の肯定的回答が79％（昨年度比－３％）、「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」の肯定的回答が96％（－１％）であった。	・単級のため、人間関係が固定化してしまうことが多々ある。道徳や毎日の活動を通して、多様な側面を認め合える集団づくりを進めていく必要がある。 ・担任や担当者だけでなく、不登校児童に対する認識を広げ、対応を学校全体として行えるよう情報共有をより密にする必要がある。 ・長欠児童や行き渋りなど、不登校につながる可能性がある児童への対応を考える必要がある。 ・「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して過ごすことができる」「自分には、よいところがあると思う」に対しては、学年により肯定的回答に大きな差があった。それぞれの学年、児童にあった対応を進めていく必要がある。 ・子どもの様子を見ていると、相手を傷つけるつもりがなくても他者から見ると相手を傷つけてしまうような言葉を自然と言ってしまう姿があるので、振り返りを行うなど、子どもが自発的に気を付けられるような活動を今後も取り入れていきたい。 ・児童アンケート「自分には、よいところがあると思う」の肯定的回答が76％（昨年度比-4％）であった。互いを認め合ったり感謝し合ったりしながら、自己肯定感を高める取り組みも引き続き行う必要がある。	・活動方針を明確に決め、実施した努力に良い成果が出ている。高く評価します。 ・不登校児童が３名、うち２名は支援教室へ通室と対応が取れており、また保護者や施設職員とのコンタクトができている現状の対応はよいと思います。子どもたちが安心して過ごせる環境づくりの継続をお願いします。 ・学校の支援体制はできていると思う。学校内外の助言など、専門性を向上させる取組がうかがえる。また、欠席がちな児童には長期休暇後などの対応や保護者との情報交換など学校と保護者が近い位置であることが大切であると思う。 ・不登校児童に対して、これからも手厚い対応を続けてほしいです。 ・児童問４（いじめや暴力の心配がなく安心して過ごせる）の数値が年々低下している。児童問６（友だちとの話し合いの中で自分の考えを深める）と併せて、学校で自分の意見を主張することが難しい環境になってきているのではないか。 ・学校でのいじめで表面に出ない隠れた部分がある。見逃しのないようにしてほしい。個別に対応せざるを得ないデリケートな問題であるので、丁寧な対応をお願いしたい。 ・今後もスクールカウンセラー等の協力を得ながら、組織的な取り組みの継続を期待します。 ・井田川小学校は児童数も少なく、いじめも少ないと思いますが、子どもたちが成長して接する社会が広がった際、いじめやハラスメントを受けた時どのような対処をすればよいのかを事例を交えた講習会等で知識づけておくことが必要と感じます。 ・年々、いろいろな支援体制に取り組み、向上できていると思う。今後も継続向上を願います。 ・児童問４（学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して過ごせる）が昨年比-3％と下がった。相手を傷つけない言葉や姿を指導してほしい。
地域連携	1　家庭・地域との連携 ○地域ボランティアの協力→見守り隊，図書館整備ボランティアの推進 ○地域の人材と教材を活用した授業の推進　→各学年で実践 1年：野菜づくり　2年：野菜づくり、公民館の見学　4年：ゴーヤづくり 2　家庭・地域への発信・啓発 ○学校運営協議会での熟議 年6回開催　→年6回開催 ○学校だよりやＨＰでの情報発信 →学校だよりの発行年１２回以上　　ＨＰ年３０回以上 ＜検証＞ ●学校アンケート ・保護者アンケート「学校だより，学年通信，ホームページ等で，学校の様子が伝わっていますか」 肯定的回答９５％以上　→９７．４％ ・保護者アンケート「学校は相談しやすいですか」　　肯定的回答９５％以上　→８８．４％ ●ボランティアの延べ人数　70名	1　家庭・地域との連携 登下校の見守り　36名　　読み聞かせ　6名　　図書館整備　4名　　環境整備　14名 クラブ支援（伊勢型紙、ファミリーバドミントン、卓球）3名　　農業支援　6名＋JA井田川職員 ○登下校時の見守りは、家庭・地域の協力が大変協力的で、子どもたちの安全安心面はとても心強かった。野菜作りに関しては、農業振興部のみなさんやJAに協力をいただけた。また、月1回のボランティアの方により読み聞かせは、子どもたちと読書活動を結ぶよい機会となった。 ○除草作業ではPTAはじめ、地域の方の力にたいへんお世話になった。運動会や日々の活動が快適にできるようになった。 ○地域の方がボランティアとして子どもたちに関わっていただくことは、子どもたちにとって、地域を大切に感じ、愛着を持つきっかけとなっている。 ○作物栽培の畑を３か所からプール横の学習園に限定したため、日常的に観察や活動に行くことが容易になった。 2　家庭・地域への発信・啓発 ○学校運営協議会は、校区合同開催を含め、6回開催できた。各委員の様々な立場から貴重な意見をいただくことができた。また、学校運営にもご理解をいただけた。 ○　学校運営協議会（学校保健委員会）の場で、保健委員の児童が保健委員会の実践を発表し、委員や学校医から助言をいただき、児童の意見表明の機会とすることができた。 ○学校アンケートの結果を学校運営協議会委員だけでなくＰＴＡ役員会の場や授業参観日に掲示し紹介した。 ○管理職が中心となったが、地域の行事や町づくり委員会の行事に可能な限り参加し、連携を図った。 ○学校だよりを年18回発行した。また、ＨＰの更新に努めた。	・地域人材を「どの学年」の「どの活動」に活用していくのか検討し、教育課程を編成できとよい。また、地域から受けるだけでなく、地域へ向けて企画発信、取組を行えるような教育活動を進めていくことも大切である。 ・子どものこと、PTA活動のこと、その他日常的なことを気軽に相談できる学校の体制を作っていかなければならない。 ・「なんでも言うことを聞いてくれる学校」ではなく、「ともに子どもたちの健やかな成長のために話し合える学校」を目指す必要も感じる。 ・学習活動の中で、地域の方とふれあう機会を来年度も引き続き設けていく。畑の活動や昔遊びなど、来年も継続して取り組んでいく。	・活動方針を明確に決め、実施した努力に良い成果が出ている。高く評価します。 ・学校と地域とのつなぎ役としての校長先生、教頭先生の尽力に感謝申し上げます。これまで同様に学校と地域のつながりを大切にしていきたいですし、今後もしていただきたいと思います。 ・地域ボランティアの協力は大きいと思う。子どもたちも地域の方々と接する機会を持つ中で、自分自身の心で物事を受け取り判断するという学びがあると思う。 ・ボランティアの人たちとの一緒にやる体験が、子どもたちの将来にとって成長の面で大変役立っていると思います。 ・保護者問１（学校の様子がよく伝わっている）の肯定評価が上昇している。先生方の努力が評価できる。 ・公民館サークル発表会での児童の作品展示や、井田川フェスティバルへの児童と校長先生の出演もよかった。 ・地域全体でできる子どもたちとのふれあいが欲しい。できれば、子どもたちのアイデアでできると一番良い。 ・現在はよいが、協力者の高齢化もあり、次につながる施策を考えていく必要がある。
非認知能力育成	1　読書活動を通じた非認知能力の育成 リーディングバディの取組等の場面で、互いに感想や感謝を伝え合う活動を積極的に行う。 ＜検証＞ ・児童アンケート「読書は好きだ」　肯定的回答８０％以上　→６７％（－９％） 2　人権教育の推進 →中学校区人権教育公開授業年1回実施、校区人権教育公開授業への年1回参加 人権教育校内研修会　年2回実施	○管理職が中心となって、夏季休業中に学校図書館を図書ボランティアと連携して地域に開放し、児童が宿題に取り組んだり、親子での来館があり、触れ合いの場や居場所としても活用した。 ○人権教育研修会では、指導主事や外部講師の招請により、教職員の人権意識を高めることができた。また、人権教育をテーマに授業参観を行い、中学校区にも公開した。 ○人権教育研修会では、指導主事や外部講師の招請により、教職員の人権意識を高めることができた。 ○人権集会では、各学年で人権学習で学んだことを発表したり、人権フォーラムで学んだことを還流することで、人権意識を高め合うことができた。 ○人権教育レポート研修会では、各学年ごとの具体的な子どもの姿を通して、人権教育の実践を振り返っり交流したりする良い機会となった。教師一人ひとりが人権意識を高く持ち子どもの些細な変化をいち早くキャッチし、教師同士で情報を共有しながら取り組んでいくことが大切であると再認識できた。	・非認知能力の育成には、規則正しい生活習慣が重要になる。そのためには、家庭の協力が大切であり、学校と家庭とが同じ方向を向いた指導ができるよう、家庭へのさらなる働きかけを進めていく。 ・非認知能力の周知のために学校だよりをはじめ、学年通信等でも繰り返し伝えていく。	・活動方針を明確に決め、実施した努力に良い成果が出ている。高く評価します。 ・縦割り班による人とのつながりで、相手のことを思いやれることを学んでほしいです。 ・「井田川つながるた」「小田町の神社」等の地域の資源や教材を活かし、非認知能力を育てほしい。 ・家庭（親子）の会話や団らんが成立しているのか気になる。 ・地域や職場での私たち自身大人同士の挨拶はできているのか